

『法華宗本門弘經抄』にみる宗学研鑽の特質について

米澤立晋

一、はじめに―問題の所在

慶林坊日隆聖人（一三八五―一四六四、以下隆師）の著述は古来より三千余帖と言われている。尼崎本興寺第二八世本妙院日顕（一六三二―一六九二）の『御聖教惣目録』⁽¹⁾によると三八五巻を収録している。隆師の著述は古来より御聖教と呼ばれ、隆師在世五二歳頃から七三歳頃の約二十一年間に著されたことが指摘され⁽²⁾、大部分は尼崎本興寺御聖教蔵に格護されている⁽³⁾。

また御聖教執筆の根本の態度は、法華経本門八品を主軸とし、そのほとんどが天台教学と日蓮教学との相違、すなわち台当異目に主眼が置かれていることが指摘されている⁽⁴⁾。

では隆師が、三百巻以上の御聖教を執筆されるにあたり、なぜ台当異目の視点から本化教学の頭場を試みられるに至ったのであろうか、ということが改めて問題となる。そこで隆師の宗学研鑽の態度について考察するに当り、隆師最大の著述で、法華経注釈として書かれた『法華宗本門弘經抄』を考察することによって、その問題を考える一助としたい。

二、『法華宗本門弘經抄』の概要

『法華宗本門弘經抄』一一七卷（本文一一三卷、目錄四卷）は、尼崎本興寺に格護されている。刊本としては、大正一四年（一九一五）から昭和九年（一九三四）にかけて御聖教刊行会から『原文対訳日隆聖人全集』全一一巻として刊行された。その後、昭和四五年（一九七〇）から昭和四六年（一九七二）にかけて、法華宗本門流の日蓮聖人御降誕七五〇年記念事業として、日蓮聖人御降誕奉讃会より『原文対訳法華宗本門弘經抄』全一一巻として再版されている。

また『法華宗本門弘經抄』について近代の先行研究としては、主なものとして以下のものが挙げられる。

① 泉智巨著『本門法華宗概論』（昭和一五年、道善寺学舎）。また『泉日恒先生著作集』（平成三年、泉日恒先生著作集刊行会）第八巻として復刊。

② 株橋諦秀稿「日隆聖人教学の序説」（『桂林学叢』第四号、昭和三八年）

③ 松井孝純稿「法華宗本門弘經抄管見」（『桂林学叢』第四号、昭和三八年）

④ 渡邊寶陽稿「日蓮宗における法華經研究について」（坂本幸男編『法華經の思想と文化』昭和五一年、平楽寺書店）

⑤ 大平宏龍稿「日隆聖人御聖教所引御書索引」（『桂林学叢』第九号、昭和五一年）

⑥ 大平宏龍稿「本興寺格護の御聖教類について」（『歴史と宝物』昭和五六年、大本山本興寺）

⑦ 北川前肇著『日蓮教学研究』（昭和六二年、平楽寺書店）

⑧ 大平宏龍稿『本門弘經抄』考―他宝と自宝―（『渡邊寶陽先生古稀記念論文集 日蓮教学教団史論叢』平成一五年、

そこで、これらの先行研究を手掛かりとして『法華宗本門弘經抄』を概観していきたい。

まず、『法華宗本門弘經抄』の構成について各品ごとの巻数であるが、大意一〇巻、通序一〇巻、別序四巻、方便品九巻、譬喩品五巻、信解品五巻、葉草喩品三巻、授記品一卷、化城喩品六巻、五百弟子受記品三巻、授学無学人記品一卷、法師品四巻、見宝塔品二巻、提婆達多品三巻、勸持品一卷、安樂行品五巻、從地涌出品四巻、如來寿量品一三巻、分別功德品四巻、隨喜功德品一卷、法師功德品二巻、常不輕菩薩品二巻、如來神力品五巻、囑累品一卷、葉王菩薩本事品二巻、妙音菩薩品一卷、觀世音菩薩普門品二巻、陀羅尼品一卷、妙莊嚴王本事品一卷、普賢菩薩勸發品二巻からなっていることが確認できる。

迹門部分は合計六二巻からなり、本門部分は四一巻となっている。特に本門八品については三二巻からなっており、本門部分の約八割を占め、しかも大意を除いた全体の三割強の割合を占めていることが確認できる。

また『法華宗本門弘經抄』における注釈の形態としては、妙法蓮華經一部八巻二八品を、文文句句にわたって解釈したものである。各巻ごとに「法華宗本門弘經抄」という題号と帖数を記載して、天台の『法華文句』の形式を依用し、著述が進められている。

その中で、隆師の法華經注釈の立場としては、釈尊の出世の本懐が本門八品にあると主張していることがわかる。そのことを『法華宗本門弘經抄』に伺うと、以下の記述が見られる。

宗義に云く三世十方微塵の諸經乃至今日一代諸經の中には法華經を以て能開の經王と為し法華經の中にも迹門より本門を以て能開の經王と為す、本門の中にも一品二半の脱益より本門八品上行要付を以て釈尊出世の本懐と為

すなり⁽⁵⁾

この文によると、本門の一品二半と八品とを相対するとき、一品二半を脱益、本門八品を上行菩薩への要法付嘱、末法下種と規定していると思われる。つまり隆師は、釈尊出世の本懐は、本門八品を説いて上行菩薩に要法を付嘱したことにありと受けとめているものと考えられる。

次に『法華宗本門弘経抄』の述作時期については、第一〇四卷囑累品の末に、以下の記載が見られる。

記者既に六十九なれば廢亡の義これあるべし、悲哉々々云⁽⁶⁾

この記述をもととして『法華宗本門弘経抄』の述作時期については、株橋先生は文安三、四年（一四四六〜一四四七）頃と推定し⁽⁷⁾、泉氏は宝徳元年（一四四九）頃と推定している⁽⁸⁾。また本抄の述作順序については、薬王品から筆が起こされ序品に還り、囑累品で終わったとする説があるが⁽⁹⁾、この問題に関しては別稿に私見を述べたので、そちらを参照されたい⁽¹⁰⁾。

三、隆師の宗学研鑽の態度

まず、隆師の宗学研鑽の態度を理解するに当たり、株橋諦秀稿「日隆聖人教学の序説」⁽¹⁾を踏まえ、(一)広学主義の否定、(二)御遺文中心主義、(三)宗祖御遺文を面とし天台三大部を裏とする見方、(四)『観心本尊抄』を教義解釈の中心とする見方、の四つに分けて考察していきたい。また『法華宗本門弘経抄』において、(一)〜(四)の宗学研鑽の態度を示された箇所を別表にて作成した。そこで別表を踏まえながら、隆師の宗学研鑽の態度を確認していくことにする。

(一) 広学主義の否定

隆師は宗学研鑽をしていく上で、どのように經典を紐解いていったのであろうか。このことを『法華宗本門弘經抄』に伺うと以下の記述が見られる。

諸御抄に広略を捨て、要を取ると示し玉ふは、末代の愚者には一部を読ざれども自然に一部を誦する易行を授けんが為めなり⁽¹²⁾

隆師によると、宗祖が御遺文に「広略を捨てて要を取る」と示されたのは、末法の愚者には一部の經典を誦誦せずとも、自然に一部の經典を誦誦するに等しい易行を授けるためであるとしている。次に、

當宗は此の義に共許して廣學多聞を好むべからず、廣學多聞は末世の正意にあらず、末世の正意は廣略を捨てて要を取り、要の信行、要の説法、要の修學、要の御抄本書、要の論義なり、末世は最極の初心始行なり、廣學をせば還つて正行を失ふ故に、佛「以要言之」して總じては本門八品、殊には分別品の半品より廣學多聞の六度三学を以て妙法蓮華經の要法に収め、廢事存理して初心を益するなり⁽¹³⁾

と述べられている。これは、隆師が極力広学多聞を排斥して唯大綱を存し、肝要を取る方法をとっていると考えられる。なぜなら、滅後末法に生まれた我々は凡夫であるという自覚に基づいていると考えられ、広学多聞を好むことで、宗祖の本質を間違つて解釈する恐れがあると考えていたと思われる。また宗祖は『法華取要抄』において、

日蓮「捨テテ広略ヲ好ム肝要」。所謂上行菩薩所伝ノ妙法蓮華經ノ五字也⁽¹⁴⁾

と示されていることから、隆師は上行所伝の妙法蓮華經こそが末法においては重視されるべきことであると考へら

『法華宗本門弘經抄』にみる宗学研鑽の特質について

れていたと思われる。また『四信五品抄』において、

四信之初ノ一念信解ト與ニ滅後ノ五品ノ第一ノ初隨喜ト此二処ハ一同ニ百界千如一念三千ノ寶篋十方三世ノ諸仏ノ出門也ト⁽¹⁵⁾

とあり、四信の中の一念信解と五品の中の初隨喜をもって、信心為正の末法の妙行を立てている。即ち宗祖は、滅後末法においては題目を受持・唱題することが、末代衆生の信行のありかたであると思われる、隆師もそれを踏襲されていたと推察される。

(二) 御遺文中心主義

ここでは、隆師が宗祖の御遺文をどのように位置づけられていたのかを確認していきたい。

末法に入つて日蓮大士之を弘め、正像迹門の諸宗を破つて本門の本尊の三大秘法を顕し、折伏を行じて不輕の如く毒鼓の縁を結び、本門法華宗を顕すべき處に、學者謬乱して本迹一致と云つて本門の本尊を滅亡せしめて悉く謗法と成り畢んぬ、乞ひ願くは情執を捨てて御抄本書を正直に拝見すべし⁽¹⁶⁾

これらの文にみられるように隆師は、御遺文を中心とした教義解釈を標榜していることが指摘できる。また室町時代当時の日蓮門下の教学は、執行海秀氏によると、

日本中古天台心酔時代であつたと言えよう⁽¹⁷⁾

と指摘している。すなわち当時、中古天台の解釈、口伝などが重視されることによつて、宗祖の御遺文が軽視されたり、中古天台の解釈をもつて宗祖御遺文を解釈することで、御遺文の意図を歪曲するという状況が存在していたと思われる。それに危惧をした隆師は、中古天台の意を以て宗祖の御遺文を解釈することを否定したと考えられる。

そこであくまで御遺文を中心とした見方で拝見することで、宗祖御遺文に示される本地本門法華經の繼承を高く掲げ、御遺文に明言のない本迹一致を主張したことに對し、本門の本尊を滅亡させたと批判される。そして、多くの日蓮門下の学者が感情的執着を捨てて、御遺文を正直に拝見すべきことを願ひ、主張されていると思われる。

(三)宗祖御遺文を面とし天台三大部を裏とする見方

ここでは、隆師が御遺文と天台三大部との關係をどのように位置づけていたのかを確認していきたい。

当門流の法門は諸御抄を以て能開と為し、外宜の玄文止を以て所開と為し所照と為す⁽¹⁸⁾

これによると、隆師は御遺文を以て能開とし、外宜の玄文止を以て所開としている。また、

当門流の法門は御抄を以て能眼能照と為し、玄文止の六十卷を以て所眼所照と為して、中古已来天台宗の法門に真偽を加へ邪正を分つて捨邪帰正する法門なり⁽¹⁹⁾

とあり、中古天台の法門に真偽を加え捨邪帰正することを喚起している。また、このことを浮き彫りにしている箇所として、以下の記述を挙げることができる。

宗旨無案内の諸談所経歴習ひ損ひの諸門流、止觀を以て能開能照と為し、諸御抄を以て所開所照と為して、本迹一致の邪見に墮し、謗法を起す小智の末学、一天に充滿せり、不便不便⁽²⁰⁾

隆師によれば、諸門流では止觀を以て能開能照とし、諸御抄を以て所開所照となして本迹一致の邪見に墮ち、謗法を起す小智が充滿しているとしている。このことから、隆師在世当時は御遺文を中心とせず、止觀を中心とした教学が広がっていたことが確認できる。そのために隆師は、台当違目を主張し大部の御聖教を示されることになった

『法華宗本門弘經抄』にみる宗学研鑽の特質について

のではないだろうか。ではさらに隆師の天台三大部の見方を伺うと以下の記述が確認できる。

當門流には久年の間諸方に法理を求め恐くは諸御抄を極むる數百遍に及び玄文止六十卷を極め、内鑑外宜迹本流通を分つて諸御抄を以て能開能眼と為し、玄文止等を以て所開所照と為して、開迹顯本の上に本門法華宗を立て、天台宗の諸聖教に於て真偽を加へ、捨邪帰正して之を用ひて助縁と為す⁽²¹⁾

當門流兩師の仰には、天台妙樂の玄文止六十卷に、内鑑冷然の邊と、外適時宜の邊との二筋之れあり、其の中に内鑑の邊は本門の意を宣ぶる故に諸御抄に同じ、吾師天台傳教と記し玉ふは此の意なり、此の内鑑本門流通の玄文止は、玄文止六十卷の裏の文底に之れあり、此の内鑑の玄文止等は諸御抄と之れ同じ⁽²²⁾

これらの記述は、天台三大部の表と裏について、文のままに理解することは、天台の面であり、像法流通の迹門法華經の意味を示しているものであるとしている。そして文の裏は天台の内鑑冷然の邊、すなわち末法流通の本地本門照とし、天台三大部本末を所開所照として、御遺文の立場から天台三大部を見なければならぬとしている。そしてこの立場から天台宗の諸聖教に真偽の判断をし、用いるべきものは用いて、捨てるべきものは捨てるとしている。

ところで、宗祖御遺文を面とし天台三大部を裏とする見方は、別表の中でも郡を抜いて多く示されており、隆師の台当異目の立場を強調せんがためのものであると同時に、当時中古天台の影響を受けた日蓮門下の存在に危惧を呈していたと推察できる。

(四)『観心本尊抄』を教義解釈の中心とする見方

これまで隆師は、広学主義を排し天台三大部を裏として、あくまで御遺文を中心として教義解釈する立場であるところを確認してきた。では次に、一体どの御遺文を中心として考えられていたのだろうかを伺っていききたい。

観心本尊抄には、八品と一品二半と種脱相對して、一往分別して再往は序正流通俱に滅後のためなりと釈し玉へり、此の心を以て法華取要抄を思ふに、再往は略広顕本共に滅後の為めなり⁽²³⁾

これによると、『観心本尊抄』には八品と一品二半を種脱相對して、序正流通ともに滅後のためであると解釈している。この立場から『法華取要抄』を見れば、略広顕本共に滅後のためであるとしている。このことから、隆師は『観心本尊抄』の眼を以て宗祖の御遺文を見るべきであると思われる。また、

諸御抄の法門は第三の教相の上に只肝要を取る大綱の一筋なり、是れ末法下種の本門の本尊の教相なり、此の本門の本尊の出處は涌出品已下八品なり、是の上行付属の本尊は釈尊出世の本懐なり、されば諸御抄の中には観心本尊抄を以て總の肝要と為す、既に八品を以て滅後の本尊と為して下種結縁を成ずるなり、總じては観心抄一卷此の意なり⁽²⁴⁾

とあり、隆師は滅後下種の本門の本尊は、本門八品に説き表されていると考えられていると思われる。涌出品では、上行菩薩を召し出して末法の唱導師を定め、寿命品では、付嘱すべき所付の妙法蓮華經が顕されている。そして神力品において、本仏釈尊は要法を末法の法華經弘通のため上行菩薩に付嘱されるが、この付嘱された南無妙法蓮華經を下種・唱題することこそが、成仏への道が開かれると考えたとと思われる。そして、このことを解説立証するものは御

『法華宗本門弘經抄』にみる宗学研究の特質について

遺文のなかでも特に『観心本尊抄』であるとしている。そしてこの『観心本尊抄』を中心として他の御遺文を見、加えてこの立場から天台三大部本末を用いることで、宗祖の真意を導き出すことを試みたのではないかと思われる。

また、大平宏龍先生によると、『法華宗本門弘経抄』における『観心本尊抄』の引用箇所は計五八九箇所⁽²⁵⁾のほり、三大部とされる『立正安国論』計四九箇所、『開目抄』計二九八箇所を大きく上回っていることが理解できることからも隆師は、『観心本尊抄』を最重要遺文とし、教義解釈の中心として据えられていたと推察できる。

五、おわりに

以上、『法華宗本門弘経抄』における隆師の宗学研鑽の特質について確認してきた。このような、隆師の宗学研鑽の態度について執行海秀氏は、

日隆が独自の八品思想に依って、台当の相違を分別し、精細なる理論体系を組織したことは、当時の教学界に独歩の地位を占めるものと見るべきである。⁽²⁶⁾

と宗学史上における隆師を評価している。このことから、隆師は当時の中古天台思想の影響をうけた宗祖の教義・教学の理解を否定し、教観重視の日蓮教学の構築を目指した学匠であったことが伺える。

そして、隆師の宗学研鑽の態度から、本門八品に重きを置いた理由を伺うと、

宗義に云く今経の大意とは本より迹を垂れ迹に依て本を顕はし上行を召して八品を説て本地の妙法蓮華経を付し末代下種の唱導を譲り、教弥実位弥下の易行を立つる事积尊出世の本懐なり⁽²⁸⁾

とあるように、法華経本門八品を説いて、南無妙法蓮華経を上行菩薩に付属し、末法の衆生に下種することこそが積

尊出世の本懐であると考えられたからであると思われる。そして、末法の衆生である我々が成仏するためには、本仏釈尊より上行菩薩へ付嘱された本門の肝心である、南無妙法蓮華經を受持・唱題することこそが成仏への唯一の道であると考えられたと思われる。こうした隆師の教学は、単に多聞強識を目的とする教学ではなく、末代衆生救済を目的とする為の教学であったのではないだろうか考える。

また、隆師の宗学研鑽についてのより精査な考察、並びに本門八品正意という日隆教学の重要課題である、上行付嘱、末法下種については、今後の研究課題にさせていただきたい。

注

- (1) 『桂林学叢』第四号（昭和三八年）所収。
- (2) また大平宏龍氏は、『本門弘経抄』考（渡邊寶陽先生古稀記念論文集『日蓮教学教団史論叢』平成一五年、平楽寺書店）において、隆師関係の諸文献の中、著述と考えられるものは、重本・断簡等を除けば二七四巻ほどであると指摘している。
- (3) 株橋諦秀稿「日隆聖人教学の序説」（『桂林学叢』第四号、昭和三八年）。
- (4) 右同。
- (5) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第一卷八頁。
- (6) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第一卷二一九頁。
- (7) 「日隆聖人教学の序説」。
- (8) 『泉日恒先生著作集』第八卷七〇頁。

『法華宗本門弘経抄』にみる宗学研鑽の特質について

(9) 株橋諦秀稿「日隆聖人教学の序説」。『泉日恒先生著作集』第八卷五一頁以下。北川前肇著『日蓮教学研究』四七五頁以下。

(10) 拙稿「日隆著『法華宗本門弘経抄』の一考察―述作の次第を中心として―」（『日蓮教学研究紀要』第三七号、平成二二年）

(11) 株橋先生は隆師の学問的態度として、①広学よりも要学、②御書・本書拝見の心得、③御書と天台三大部に対する研究態度、④天台三大部における文面と文裏との両義、⑤宗祖の御書に対する態度。の五つに分け考察している。

(12) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第九卷六九三頁。

(13) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第一一卷八二二頁。

(14) 立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本 日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺、昭和二七年、平成二二年改訂増補第三刷、以下『定遺』）第一卷八一―六頁。

(15) 『定遺』第二卷二二九五頁。

(16) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第一〇卷四六一頁。

(17) 『日蓮宗教学史』（昭和二七年平楽寺書店）五頁。

(18) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第九卷三〇二頁。

(19) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第九卷五三三頁以下。

(20) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第五卷五六〇頁。

(21) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第一〇卷四四九頁。

(22) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第一〇卷五三六頁。

(23) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第八卷二〇九頁。

(24) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第八卷二〇七頁以下。

(25) 大平宏龍稿「日隆聖人御聖教所引御書索引」(『桂林学叢』第九号、昭和五年)

(26) 『日蓮宗教学史』一一一頁。

(27) 宗学史上における日隆教学の評価について、その他に、望月敏厚氏は、「日隆聖人の顕本論について」(『大崎学報』第三号、大正三年)において、「隆師は常に像門の復古論者であつた如く、この教観表裏の争論も龍華以来の教道を重んずる思想に復たらしめんとした、復古主義者であつたのである。即ち前節には天台の復古論者といつた如く、今も像門の復古論者であつたのである。」と評価している。また茂田井教亨氏は、「中世における日蓮教学の成立と展開」(影山堯雄編『中世法華仏教の展開』、昭和四九年)において、「分流諸師のうち、その著述の規模、大系の整備からみて、宗学の名に値するものは慶林日隆である。」としている。そして北川前肇氏は、『日蓮教学研究』四九七頁において、「日隆の業績は、宗学史上、不朽のものであることは間違いない」とし、それぞれ宗学史上における日隆教学の評価を行っている。

(28) 『原文対訳法華宗本門弘経抄』第一卷四五頁。

【別表】

(一) 広学主義の否定

帖数	品名	掲載巻数	掲載頁
第一帖	大意	第一卷	六一頁～六二頁
第四六帖	藥草喻品	第五卷	二八六頁
第五八帖	法師品	第六卷	二八三頁
第五九帖			三五一頁～三五二頁
第八九帖	如來壽量品	第九卷	五七六頁～五七七頁
第九一帖	分別功德品		六九三頁
第一〇三帖	如來神力品	第一卷	一二二頁
第一一三帖	普賢菩薩勸発品		八二一頁～八二二頁

(二) 御遺文中心主義

帖数	品名	掲載巻数	掲載頁
第一帖	大意	第一卷	一三頁～一四頁
第七	通序	第一卷	三三二頁
第九九帖	如來神力品	第一〇卷	四六一頁

(三) 宗祖御遺文を面とし天台三大部を裏とする見方

帖数	品名	掲載巻数	掲載頁
第一帖	大意	第一卷	三頁 三六頁 四四頁～四五頁 七三頁～七四頁 七六頁～七五頁
第二帖			九六頁 九七頁 一一〇頁～一一一頁 一二三頁～一二四頁 一二六頁～一二七頁 一二九頁～一三〇頁 一三一頁～一三二頁 一三四頁
第三帖			一五三頁 一六八頁～一六九頁 一八一頁 一八三頁 二〇六頁～二〇七頁
第四帖			二四八頁～二四九頁
第五帖			三四六頁～三四七頁

『法華宗本門弘経抄』にみる宗学研鑽の特質について

第一九帖	第一六帖	第一四帖	第一三帖	第一二帖	第一一帖	第一〇帖	第九帖	第七帖	第六帖										
					通序														
					第二卷														
四八八頁	三一六頁	三〇九頁～三一〇頁	二〇五頁	一七五頁～一七六頁	一六〇頁	一一一頁	六一頁	四〇頁	二八頁～二九頁	一八頁	六七〇頁～六七二頁	六六二頁～六六三頁	五六八頁～五六九頁	六〇三頁	四三一頁～四三二頁	四二一頁～四二二頁	三九八頁	三七二頁	三四七頁～三四八頁

第三帖	別序	第三卷	一五四頁～一五五頁
第二四帖	方便品	第四卷	二〇六頁
第二五帖			二二〇頁～二二一頁
第二六帖	譬喻品	第五卷	二五三頁
第二九帖			二九五頁
第三四帖			三一四頁
第四二帖	信解品	第六卷	五〇七頁
第四四帖	菓草喻品		一七二頁
第五〇帖	化城喻品		三六頁
第五一帖	五百弟子受記品		四九四頁
第五四帖		五六〇頁	
第五八帖	法師品	第六卷	七七頁～七八頁
第五九帖			二七九頁～二八〇頁
第六〇帖			二八八頁
			二九〇頁～二九一頁
			三六一頁～三六二頁
			三七四頁
			四三七頁～四三八頁

『法華宗本門弘経抄』にみる宗学研鑽の特質について

第八〇帖		第七八帖	第七七帖	第七五帖	第七四帖	第七三帖	第七二帖	第七〇帖	第六九帖	第六八帖									
			如来寿量品			從地涌出品				安樂行品									
											第七卷								
						第八卷													
六二八頁～六二九頁	六〇七頁	三九三頁～三九四頁	三九二頁	三九一頁	三八七頁	三八四頁	三七〇頁～三七一頁	三〇三頁	二〇七頁～二〇八頁	九九頁	五一頁	六五九頁	四七三頁～四七四頁	三六四頁～三六五頁	三一〇頁～三一頁	二八三頁	二六七頁	四八七頁	四五七頁

第八二帖	第八三帖	第八四帖	第八五帖	第八七帖	第八八帖	第九一帖	第九二帖	第九二帖	第九四帖	第九五帖	第九六帖	第九七帖						
			分別功德品			隨喜功德品			法師功德品		常不輕菩薩品							
第九卷						第一〇卷												
一六頁～一七頁	一〇七頁	一四四頁	二〇六頁～二〇七頁	二四〇頁～二四一頁	三〇二頁	四五二頁～四五三頁	五三三頁～五三四頁	六八六頁	二頁	一七頁	四四頁	六〇頁	九二頁	一八六頁	二五三頁	三一二頁	三二七頁	三四五頁

『法華宗本門弘經抄』にみる宗学研鑽の特質について

(四) 『観心本尊抄』を教義解釈の中心とする見方

帖数	品名	掲載巻数	掲載頁
第二帖	大意	第一卷	一一八頁～一一九頁
第一二帖	通序	第二卷	九七頁
第六〇帖	法師品	第六卷	四二八頁
第七五帖	從地涌出品	第八卷	二〇七頁～二〇八頁 二〇九頁
第八〇帖	如来寿量品		六〇一頁

第九八帖			四〇四頁
第九九帖	如来神力品		四四九頁～四五〇頁
第一〇〇帖			五三〇頁
第一〇四帖	囑累品	第一二卷	五三六頁～五三七頁 五六〇頁
第一〇五帖	薬王菩薩本事品		六〇七頁
第一〇六帖			一五〇頁 一七八頁 二一八頁 二五七頁 三一九頁

第一〇〇帖	如来神力品	第一〇卷	五三九頁～五四〇頁
第一一二帖	普賢菩薩勸發品	第一卷	七六五頁

『法華宗本門弘經抄』にみる宗学研鑽の特質について